萬葉集略解 十四下

和書門	
類	
號	二〇四三七
函	五八
架	四
冊	三二

內閣文庫	
和書	
類	
號	二〇四三七
冊	三二
函	二六三
架	一六

內閣文庫	
番號	和 20437
冊數	32 (23)
函號	263 44

国立公文書館
National Archives of Japan

萬葉集略解

四上

国立公文書館
National Archives of Japan

敵ヲ敵ニ誤

相聞

吉非思家婆伎麻世和我勢古可伎都楊疑宇禮都美可良
思和禮多知麻多年

こゝしーけがきませわのせこかやつやぎうれつみのこーわれるちまるこん

多くの人のいひさるべき事ひぢぞて、事を言ふいひなりてこと
すれとも

宇知日佐須美夜能和我世波夜麻登女乃比射麻久其登
爾安乎和須良須奈

うちひさすみやのわがせはやまとめのひざまくごとにわをわすらす
なし

うちひさすは枕、こやのるごせは東の国造部司などの事よりくだる
日仕なるをいつ、やまとめは大つ世女をのごとし、垂仁紀に后の寸膳を枕と
しくいねまくとありるを、又崇神紀ごの人の膝のへを枕こんとしよめ
るはいとをかしかれへ

奈勢能古夜等里乃乎加耻志奈可太乎禮安乎禰思奈久
與伊久豆君麻氏爾

なせのこやとりのをかぢしなかだをれあをねしなくよいくづくまでお

万解十四下　一

名夫のごとく、妻は男女とかよいつゝ、どりのをこの八比乃なるべし、孤は路、
志は婦、比は器、須は中のたわるゝ、集中巻のたをりとよめり
その妻をもを男の中絶くまあるゆゑ、ねなくは不令寝、よは誤いく
は息、こゝは中絶しの事、系は寄ねで、寄息をつくよのでよ知思とよ

伊禰都氣波可加流安我手乎許余比毛可等能乃和久胡
我等里氏奈氣可武

いねつけはかるるあがてをこよひもかとのわくごがとりてなるでのん

いねつけは粳をうちつきて米とするを、かるは和名抄蹴阿加利手足拆裂也
とうをは、笹のまるがをく歌うんといつのは、ひとは稚女なは、あるし、良
氏ちごの女の弟をくぶりて、稚女の業をくいつるをぞ、さ、ちくん
し山ごつ海人ちごよ笹くいて、その笹をかりていなくいねつのねど
といふをひし、笹のまるのをよいて

家ハ我
敵ヲ敵ニ誤

多禮曽許能屋能戸於曽夫流雨布奈未雨和家世乎夜里
氐伊波布許能戸乎
たれぞこのやのとをたたそをるにはなみよわのせをやどをいそなつのとをと
吉事記ニ八千矛神の出雲ふをとめのなをやいたどを淤美豆夫良比わがたて
せれば比許豆良比わがたせばと有く、押開き門開うんとなる方の
にはなみハにはひなり、十一月公の新嘗祭の時ハ国の廳にて国司
参もれば、其国の里長よりとハ、造り廳ニ集まり、其れ夜その里長
ちとの家にて、妻のお忌しく立てを、思ひまうち男の戸をおし
ひらこうんと開る時、其妻のよめるうた、よるかつしくのわせを
よんるそ、家〳〵まくあるられとなるハひと〳〵、家元度本我ニ他るとうとハ

安是登伊敝可佐宿雨安波奈久雨眞日久禮氐與比奈波
許奈雨安家奴思太久流

あぜといふのそねはあハたなよまひそれてよしるハこなよあけぬとたるる
あぜといふハ伊のぞとなるすのうへ、さねはあいちくハ、宮ニ逢ことの、ちや、
言ふられてハ、ふくるなていふをいふ、よしるハ、ふるのふくハ、月のなて
ちるハ、ふなるて、夜明ぬるあたるまくハ、宮ニ逢まくきてもちる
わぎへと女のふうぎるへ、神代ちるへ、ぞての夜をまひとりまくハ
の、ちへよひるハ、ふるひなハへ、あけぬハ、ひるへ、ちぐハ、あたを男ちわ、ち角
いなんき、大和ニ思太ハ時といふこと、ハ、未あ和思太ハ、又わ、ちんの之太ハ
又うなけ之太ハ、実サ、ちれも之太ハ、ちぐ、ちるへ、ぞ、ハ、ちるへ、ぞ、ハ、時ニ
さてあ朝たとりはハ明る暁といふこと、ちぐ、といてあ、ちぐ、ちへ、

安志比奇乃夜末佐波姚登乃比登佐波爾麻奈登伊布兒
我安夜雨可奈思佐
あしびきのやまさはひとさはにまなとといふこのあやうのちさ

山澤と多の行ひ物して、又ものねて人さそふ事ひしくるを、住吉神
父母は神にまなるべで、さいぐくるよ、あやめのこほりの大伴のおほ石年春女
出産とらるふひとりして、唐ものなどを家に他人にかすめ、婚妻のこと
を真なむちめと人にもをくたりてむ、その女こそ爲づるものなれば
ゑへかりより浦くゆくといふこと、ねいそれきされど、程ふるゝ程考ゴト

麻等保久能野雨毛安波奈年巳詩呂奈久佐刀乃美奈可
雨安敝流世奈可毋

まどほくのぬまもあはなんこゝろなくさとのみなとのまあるせれのも
さいは詞まくまくこゝろえなるのさい中に、よまかみつけぬさのたどうづ川
詠まくるゝあれなくひとりのみしてといつるまゝ

比登其等乃之氣古雨余里氏麻乎其毋能於夜自麻久良
波和波麻可自夜毛

ひとごとのもどきにはよりて、まをどこものれやどまくるゝわはまかどやも
まをどこもは藤まくこゝはくれ枕をいてゆ、冠解考こゝまくこゝの陰まくこゝ
さいは詞、平ハ小ふくゝ小管小藤の小のみ、れやどは同じく、わは吾ハ人、このことハ
人言のもさるよりて同じ枕とせどゝんやハハ、ら、ハ吉げとし吉夜せ
むとなり

巨麻雨思吉比毛登伎佐氣氐奴流我倍雨安杼世呂登可
毋安夜雨可奈之伎

こゝのかきひとをさしくぬるこのこはあどせるとかもあやはかもこさ
言葉海の紐をどりはこの用ちをもちくをまてこよあるなるこゝかゝ
衣をどこゝる歌人ぬるものくはハ屋るこの上を、あどせるとのもハ何と
せんとてのこゝ、ヒとをとりとりどれど、杵の用言をもてそれど
さるハあゝどで

麻可奈思美奴禮婆許登爾豆佐稱奈敝波巳許呂乃緒呂
爾能里氐可奈思毎
まどのなみめれば　ことしげやねをくばうるのをるよのもてかなしも
麻ハ同れ度れバ人ゑ　ひ出ゑ　ねをくバのせハ疲ゑ　度ねバ　袖と
延ゑ　奈敝とハ　波ゑ　ハ助辭　ゑ　ハ　ゑ　ハ　ゑ　ハ

神こうけめといつゆ、そこうハ人のつひよりてるをいよ、宮ちこ、山どのの〳〵、
かゝ〳〵のかるゆハ平ゆよハけハで、これ公家人のこ、山るの尾ハ春ハみじく、えゝ
るゆこのまく、人さえをゆて摘んとして行よ、やゝ、さくなるゆでこゝ
こうびて、そまるこゆ摘ゆづこほどゆるをづく吋よ、係よ之ちて、又行をえの方まて
えるゆと、人又行く摘んとゆれハ又をきのかくゆ〳〵、仰よ摘ゆでこゝこのく、
されハ吋ゆる後のけゝいよハ尾の後のかく歩ゆるをいよ、ゆなゝでゆハ
摘ゆべみく、たゝてゆるさハ山をの摘ゆるゆ〳〵ゆゝゆ〳〵ゆゝ、ゆゝゆ〳〵
かく、女のそゆるなびくづきさまゆるゆゆえなゆゆゝ、つひよなびのぬみく、
ちゆめなびくづくゆえゝれゆゆて、んをかゆくいひよわてゆんゝしのこと
こゝいてかちの後けてよくゆるけてゆ仰ゆきこなゝゆハ後るけれゆゆべき
ちゆけえゝといゆるハけをゝゝゆんけをゝのかちけいゆゆ行考ゆゝ

由布氣爾毛許余比登乃良路和賀西奈波阿是曽毋許與

比與斯呂伎麻左奴
ゆきけふもこよひとのらろわゆゆせちハあゆせゆもこよひよりろきまきぬ
ゆゆたをゆゆゝ、ちハをゆまんとゆゆるゆゆのらろハのるをゆをゆゝ、ゆ
けもかたゆるゆゆゆゆをゆ侍まゆこゆぬとゆ、ゆハゆ行ゆゝよのまゆ
こせねのよりる同ゆゆ、これハよをゆハ、みハゆゆゆるゆせなゆゆのゆるゆハゆゝゆゝ
安比見氏波千等世夜伊奴流伊奈乎加毋安禮也思加毛
布伎美末知我氏爾
あひみてハちをせやいぬるいなをかもあれやをのそゆきみまちがてゆ

考十一ゆ歌ゆり

柿本朝臣人麻呂歌集出也
思麻良久波禰都追毋安良牟乎伊米能末爾毋登奈見要
都追安乎禰思奈久流

たまくらにねつてもあらんをいのあのみはそらなみそつてあさねしるる
夏のみやとてハ雨も夜ぬのしをるつてそのくるたびの伊ハ枕の借るて、
おものみやとてをつくん於采ハ老せ寺奈ふ於采ゐのせそとらひと面ハ
面影と思きいるをとの次る於毋よみそるるとしる先ゐ面影を考
こるハ新よ月そつてとあれハいづれも思きいるんと為ハそれつれ
ど接るねつてもあらんをとりふハ変をも月そ、うまいせんといるふく牛
ゆよ差るるんそうまいしぎてきといるるぞ、あをねしなるハ
和と夜せしめあとりるそんよるも同浦る
比登豆麻等安是可曽乎伊波牟志可良婆加刀奈里乃伎
奴乎可里氏伎奈波毛
ひとづまとあぜこのそをいたんこのくびのとなるものきぬをかやてきならも
あぜこそをハ何のそれをとく他妻を伊ぞ他るふるおぞきぬをいたん

たのいそぐ偽の衣を借るとくまるものを思ハ上のた
このくびのこのそぞをもんへそぞてきなハのをといるぞ、ぞ上ハ人毛ハ
加藤
左努夜麻爾宇都也手能登乃等枹可騰毋禰毛等可兒呂
賀於由爾美要都留
さぬやまにうつやをのとのとほのぞねとのころぶおゆよみそつて
さぬ山ハ北のなるぞ、ぞハさハ表ふるく野山とをれつれど、弥よ
斧うんるんるいうぞあんん井よ斧の者の遠うれどもとるる凡のとの
遠をとつぞるあく、斧の者ハ遠をといるん科のく由ハ毋の偽ふく
於毋よ月そつるちるぞ、遠ハ遠くあれども者と於かく為て
ねんるのしをあ為ぞる新よ月そてるしを、為ぞるとく男の為
をりるくいるる

宇恵多氣能毛登左倍登與美伊低氐伊奈婆伊豆思牟伎
氐可伊毛我奈藝可牟
うちつけの　ことさへとよみいでゝいなばいづゝしむさてのいくのちぎりの
植ばなひきてをとゝいとかるれ大河原の宇恵具佐（ウエグサ）もそ見る竹の末の
ゆるりさわぐをばきゝくかとゝとつゆそハゝこそかてはとゝぐ
を法くいつくいでゝいるぐ防人の出立をりつるぐゝいでハいづち
なぎさうんハなげうんこゝよそあみるふのらびよわがまちぶいづ知むき
てこのゆぐがち家（ケ）の手とりつるかゝと藝元唐本氣とれる
古非都追毋宇良牟等須禮杼遊布麻夜萬可久禮之伎美
乎於毋比可禰都毋
こひつゝもとゝうんとよそれどゆまやまかくれきみをとゝおもひかねつも
考十二抗のうのよりちやゝ考ともれど本作同出歌ゆゝ公がおもかゆゝくよ

敬ヲ離ニ誤

敬ヲ敬ニ

とゝ考ハ同じ事のよりゆゑ
宇倍兒奈波和奴爾故布奈毛多刀都久能奴奴賀奈敬由家
婆故布思可流奈毋
うべてなゝわぬるよこふもたとつくのぬのなへゆけバこふしこるなもし
うべてなゝ誤る筆者こゝ考の奈ハ良（ナ）るをてゆ和ぬハわゝとつこを
をもこわぬとつゝるぐ、たとつくのハ立月（タツキ）こゝ考ハ多刀（タト）とつこゝ
ぬのなへゆけぐ、流去（ルキ）者ちゝ考ハ月日とゝいてこゝ
うるなもゝ妹ぬ考ハ主行月日の法れちく久しく
知ぬれどゝいつく
或本歌末句曰努我奈敬由家杼和奴賀由乃敬波
此賀由の下可の字為ゝるの、わぬがゆゝるへばゝくなゝられゆけど主ゆゝねを
りてこゝ上ゝ夜れバとりてを佐祢奈敬波（サネナヘバ）といつるゝ同じ、宝考ゝ或人のいてく

賀由ハ由賀と下上と注れるごとく、わぬゆちくバさとにてもしきてり
安都麻道乃手兒乃欲婢佐可古要氐伊奈婆安禮婆古非
牟奈能知波安比奴登毋
あづまぢの たづのよびさかこえて いもがあれば こひんなのちかぬめひぬとも
たづのよび奴とるむ、そもそほんの別ハ三まきゆれば人者十二みさだるる
ちくさとる毋のこぎ出なばくゝ之ゝ久ん氐ハあひぬとも
等保斯等布故奈乃思良柵爾阿抱思太毛安波乃敝思太
毛奈爾已曾與佐禮
とほしとふこなのさくねあかさぶ あハ多へさぶ たなよこそよされ
色しとふとこなくめづるこゝろ、こまのさて氐ハ手よさて、人のゆづれ
ゆくるゝ、ゆハ手ものゆ手りつさゝとゐハいれてゐなくて空ちち
此山遠きものゆゑゆるゆとゆえゐ日ゝあること、遠方ゝ之者日しるる

たゝ、こちの手ゝねゝ是とつきゝる八、このゝことの言て、神ゝのゝ人のゝ手と交て
いるちちの例ゝく、手ゝねゝあゝハ手ゝねのゝ人あるゝ、ゝりゝとゝるとあゝてゝ、ハ
ちのゝこのゝえゝとゝいゝかゝて手ぶのゝえハゝよゝいるゝ、あゝてゝて、ハ、ちゝて、ぶ
叶ゝとゝるゝ、ゝ出ゝ、ゝあゝくゝるゝくゝ、ゝだゝのあゝ、ゝ叶ゝとゝるゝ、ゝあゝるゝとゝあゝる
ゝとゝとゝゝ、ゝたゝるゝとゝとゝゝれゝ、ハ、ゝ、ゝゝ、ゝゝゝ、ゝゝゝ、ゝ

於保伎美乃美巳等可思古美可奈之伊毛我多麻久良波
奈禮欲太知伎努可毋
わたのきみのみことかしこみかなしいものたまくらはなれよるちきぬの
防人の立時のうたゝゆ出なくうたくこゝにあれの妹きとゝ
よるなるべし、ちぶちハ夜立とあの伎べ立ちハよぶちハ伎のるゝ
とうてゝ

敵ヲ敵ニ伎毛乃ト有ベシ

安利伎奴乃佐恵佐恵之豆美伊敵能伊毛爾毛乃伊波受
伎爾氐於毛比具流之毋
あゆぎあのさゑ〳〵さづみいとのいもにきてもひぐるしも
柿本朝臣人麻呂歌集中出見上巳詮也
巻十殊衣の狭蓋左謂さづゝ家の妻ものいもにさゝて思金偉裳
ゝあゆてゝゝ伎せゝ人麻呂家集後撰ゝ歌れゝるあとゝあゆ

ハ此ハ此ゝ毛ゝ歌ゝとゝ毛ゝとゝ毛乃乃と有ハ誤るれば一の乃ガ
ハ誤ゝ伎の詮ゝ之ゝ房本記ゝ之ゝ

可良許呂毛須蘇乃宇知可倍安波禰杼毛家思吉巳許呂
乎安我毛波奈久爾
かゝゝるもそのうちかへあはねどもけきこゝろをあがもハなくに
巻十一歌乳ゝ巻ハ染ぬ衣裳のあたゝゝて久しくなれば
て古へ婦人の衣の裾あはぜかゝんうちかへハ打返ゝ衣ハ打返て
今ゝものあれば打返ゝ一二の句ハ不和とゝ房べ久きゝハ異なるゝ

或本歌曰可良巳呂毋須素能宇知可比阿波奈敵婆禰
奈敵乃可良爾許等多可利都毋
あはなへばおりねばくねるゝのゝゝハ不和なるゝゝふべゝこゝたゝうゝてハ
言痛ゝ

須下流ハ衆誤

比流等家波等家奈敝比毛乃和賀西奈爾阿比與流等可
毛欲流等家也須流
ひるとけばとけなへひものわがせれよあひよるとかよるとけやもけ
とけるくハ不解くひもの乃ハ之ガとるるぞ〜あひよるハ共よるおれよるくよのつ
まうこせれとうハ共とこるこるくよせよるてらくうくえ屋なよるとけも
須家とをとよとこそ衆解易きくさくいそひて解しとくくは又解るとをは
あくくさのごとくわごと解くいそくくいかるてすハこめ形くいつり
安左乎良乎遠家爾布須左爾宇麻受登毛安須伎西佐米
也伊射西乎騰許爾
あをををとをなげよふをさをようあををとくあををとくあををとく

てごるのあと改よいてゆこ八海人のまらうこ、そこ八ゆとそこ、まこねとるく
来てくいあらハゆるゆとくとくしとそるるゆ、るあくゆるこ
可奈思伊毛乎・由豆加奈倍麻伎・毋許呂乎乃・許登等思伊
波婆・伊夜可多麻斯爾
かなつ、いもとゆづのたなべまき、こもごろをのこ、いたこ、いやかるまし、ふ
智ゆて白くちこ、岩八華と斜よ並べ繰けぶらよともこ、れどくて八岩の
ふよ寸、毛八お射らるるよ竹巳男の名ら来と岩洞るをゆて、並べ岩と
いつるるくんこそこ、ろ八如といつるとこ、此ちるを時の毋巳ゆとかゆ毋八
真くゆ其呂八其名ゆうてゆこ同じ、岩九ちこ、ろくを如巳男とるるれこ
その男とりつくいやるつるまし、ふ八射義勝ん、ふていつるく、この白ゆかる
くゆさくくあんくるほこめ男こ、ちなるこ、ぶ神こ、ゆ、るんとゆ、ゆるる蛛ゆ、うこの
るるよ八力ゆ及ぶこ、ゆこ、ゆるのこれま、言ちゆ射義かこ、ゆ、ゆ、ゆて八

疑のやの稗とこのゆこ、射ぞこいそこ、ハゆこ、いやの孫ゆこ、ゆ
安豆左由・美須・恵爾・多麻・未吉・可久・須酒・曾・宿奈・莫那里爾
思於久乎可奴加奴
あづさゆみ、すえ、たまき、かくをこ、ぞ、ねるなゆ、れくをかぬく
吉のゆ八まのかぎりて化ゆる八孫ちて、ゆ来ゆ陸ちゆ、鞆のこちの
ちくくの鞆ゆ、ゆ八ぬ所よ、ゆ、ま、ゆ、ゆを、ゆ、ゆ、ゆ

とりて　たのもしく　あるまじきハ　まことに　切なる　ものなり　とぞ　元度卓

宿奈大帝　ありてよき

於布之毛等　許乃毋　登夜麻乃　麻之波爾　毛能良奴　伊毛我

名可多爾　伊氐牟可毋

おほうみの　たとやまの　まゝ　ばかり　のらぬ　ものなれば　なかくて　よりでんこそ

おほうみ　ことハ　登繁本の　男　なく　も　等ハ　たゞ　ゆく　本　ことい　考徳　化模騰

巣登　ゴト　ニ　オフシミモト　はるハ　なけど　ゆく　ことの　かぐやま　ハ　此本　山　て　ことの　ことを　き

ねり　なく　まゝ　ばかり　ハ　よりハ　本　山の　ことば　とらひ　うて　て　こハ　真　數　く　真ハ

祠　數ハ　たゞ　ゆく　のこ　のこ　ぬ　ゆく　ものを　名　こ　ハ　たゞ　ゆく　て　影　ぬ　妹　ゆく　名　ま　れ　ば

占　う　る　ゆん　や　よ　の　こ　く　よ　る　ま　こ　て　み　て　の　ら　ぬ　男　ら　う　ら　て　ゆ　る　け

ま　こ　ら　つ　る　ひ　と　し　、　ゆ　こ　ま　り　く　を　時　く　ま　こ　ま　れ　ば　あ　の　こ　と　解　ま　く　し　、　こ　定

ま　の　く　ま　と　り　く　ま　る　こ　と　い　ひ　て　く　る　こ　の　ま　と　ら　く　、　こ　ま　り　く　と　い　る

のこ　な　る　べ　し　と　ゆ　い　を　れ　き　、　宝　も　い　き　く　、　数　と　い　ま　こ　て　ま　て　ハ

中　家　代　代　考　て　ふ　、　あ　ひ　き　の　ゆ　ま　づ　く　ま　げ　、　麻　之　波　、　み　も　え　ま　ま　き

ま　け　を　お　き　や　か　く　さ　ん　と　ま　て　、　考　よ　清　言　の　波　の　字　を　か　く　う

こ　の　れ　ま　ま　て　よ　、　伝　ふ　物　を　惜　む　を　ま　ば　き　と　い　ま　し　回　言　ま　て　名

を　考　る　ま　を　ま　て　、　い　ま　て　う　し　考　る　ぬ　妹　ま　ま　と　い　て　る　の　下　な　る　も　い　ま　て　う

ひ　ま　き　ま　く　ゆ　ゆ　る　ま　、　ま　ー　ま　る　ま　ま　し　ま　ま　ま　ー　ー　ひ　る　ま　ま　る　ま　う　ま　て　ま　ハ

き　ま　る　ま　と　い　る　ま　、　ま　考　べ　ー

安豆左由　義欲良能　夜麻邊能之　牙可久爾　伊毛呂乎多氐

天左禰度波　良布毋

あづさゆみ　よるの　やまべの　ちげの　くるいかる　たて　さねどは　ふる　ま

あづさゆみ　枕詞　けし　ハ　ちる　ふ　で　ま　げ　う　ま　ま　げ　き　ま　を　延　い　て　く　、　ゆ　ろ　ハ　妹　る

べ　そ　ハ　女　の　男　の　行　く　ま　る　る　、　さ　ね　ど　の　さ　ハ　安　語　ま　て　寝　不　こ　て　寝　不　の　巻

を柿くゆぐまるをよろこぶさうく

安都佐由美須恵波余里禰年麻左可許曽比等目手於保

美奈辛波思爾於家禮

あづさゆみ　ちる　はよりねんまさこそ　ひとめをおほみなをほめられ

あづさゆみ　はる　まくさうよる　ちとハ汝を　妻ゐる　男ハハれば　まぐ

奥の五人らをぐきこほどなるくねば　端の笑のまちぐまをうちてるををく

柿本朝臣人麻呂歌集出也

楊奈疑許曽伎禮婆佯要須禮余能比等乃古非爾思奈武

辛伊可爾世余等曽

やなぎこそきれば　たちえをもれよ　あひのひとの　こひまさるなを　いのふせよとぞ

柳ハ代てとくひこだえのまるれ　ものいとせのくとハ別れをいと　考七　枝ハ　う　あ

られまくもあるみのあく川柳　ゆれまくもあるかな　川柳

乎夜麻田乃伊氣能都追美爾左須揚奈疑奈里毛奈良受

毛奈等布多里波毋

をやまだの　いけのつつみ　ふさもなく　なりもなりなぎ　なりもなりなぎ　なりもなりなぎ

柳枝ハさらよく根つきそ　ひとなを　ものなりなぎ　なりもなりなぎ　なりもなりなぎ

いとなをもさて秋中の終ると　なるとも　なるとも　なるとも　なるとも

じといふ

於曽波夜毋奈乎許曽麻多賣年可都乎能四比乃故夜提

能安比波多家波自

むてちやもなをこそまつあむ　つちの　ひこやでの　あひのたけハ

まくとも　速とも　ゆとこそ　まつあく　こもでハ　小枝　たけハ　たのりまそ

根の枝さ　かく　聖り　今を　思ふを　よいひ　くるを　ねいれ　宮を

ハ根ハ　まをとる　とく　友枝　まで　ようく　芽の　ふく　小枝　となる　物なる　かな　生く

[illegible]

[illegible]

或本歌曰、於曽波也毋、伎美乎思麻多武、年可都乎能、思比乃佐要太能登吉波須具登毋

[illegible]

兒毛知夜麻和可加敝流氏能毛、美都麻氏宿毛等和波毛布、汝波安杼可毛布

こもちやまわのかつるでのかみづまで、ねもとわかえよなのあとのえよ

こかもち山ゆ[illegible]、[illegible]かつるでハまき柳の芽のはるゝとひくさて[illegible]

[illegible]

和名抄雞冠木 賀信天乃木、辨色文成云、雞頭樹 加比留提乃木、今紫是一木名也、[illegible]

手[illegible]

伊波保呂乃、穢比能和可麻都、可藝里登也、伎美我伎麻左奴、宇良毛等奈久毛

いそほろの、そひのわのまつがぎりとやまきみがきまさぬ、うらもとなくも

上ハ伊香保ヲ能蘇比乃波里波良とよめるにもを俗の方のもの

四杯ホまでを限るゝ、ホハ崖なれバ、そひの美杯限りとゝり、ゆゑ此伊

波保の波ハ何もの方の流れるゝ、伊香の保ゆ[illegible]、次のあの[illegible]知

安奈乃といつるし、[illegible]ハ武蔵の橋樹郡のホハゆゑ[illegible]ハ武蔵

[illegible]、次の安波乎ハ[illegible]安房国の安とゆゑ、[illegible]必国ホの知

られぬを[illegible]

上ハ限りといへん[illegible]、男の[illegible]

[illegible]

きと、[illegible]待[illegible]限りゆゑ[illegible]

多知婆奈乃・古婆乃波奈里我・於毛布奈年・巳許呂宇都久
志・伊氐安禮波伊可奈
たちばなのこばのたなびおもふ

和名抄武蔵橘樹郡橘樹郷知波奈乃古婆乃波奈里

女のうちるたちばなとりてうたよみ侍りける人の歌とかとあるよらんとかなといつる侍れのれ又ゆうつくしハもとゝいであれハいとのこ

後人

可波加美能・禰自路多可我・安也毛・爾阿夜・爾左宿左寐氐
詩曽・巳登爾氐爾思可
かたるみのねしたのやあやふあやよさねさねてそとふてあ
かうゝとよてかのべちゝとゝく根白るゝゝ川の岸よ生ゝるゝ山ゝ

洗たれゝく布の白くゝ又ゆゝを根白といつるちゝん、さてかとあと云ゝ、
かやおやゝとゝを云ねゝる序ゝ、あやよハあゝてゝ山ゝ同じく歌ゝ詞ゝ、
ゝねいつゝかさハ爰ゝ寝ゝ寝ゝてゝくゝるゝいひやられゝとゝ、可ハ法ゝく、
上のゝとゝとゝを結ゝり

宇奈波・良乃・根・夜波良古須氣・安麻多阿禮婆・伎美波和須
良酒・和禮和須流禮夜
うなばらのねやゝらこすけあまゝあれバきみハわすらすわれとするれや

ゝはゝゝハゝをゝとゝゝゝゝ海原ゝ海原ゝ海原

わもこまハたるのるを越こし、わもこられやハわもこられぶと越るねこ、こられ
むやといつるなり

乎可爾與世和我可流加夜能佐禰加夜能麻許等太其夜
波禰呂等敝奈香母

をこのふよせ わのるかやのさねのやのまことなごやハねろとんかなのも
をこのよせハ岡よ著よるてこ、さねなごやハさハ仏の夜後よこ、根莖こ、それよ
寝を流りとまの白こるる、ちごやハ草ロ蒸衾奈胡也我下丹ねられぶ、
古事記乎斯夫須麻余古屋賀斯多ともるも同じ、ねろとんるのもハねん
といまるくもふく、まここふちこやこのハねんしいそをとつれなきを恨む
也と弱ハいそれき、宮ちこ宮よ也のよせハ宮くハうらで、宮ハたづかやをり
るあをといつるのこ、さく莖を女をたとこく、よをりこハ引りの也ちびの也て刈こ、
たこるこるこハ女を我方へよせるびうやんとられどくく大まこまねこやとよく

ちびきちこるる莖こ、ちこ、ちこれこ、まここちびけこ、まここ山ハ寝人といのねこと
とのはけるくまここいつるたーこのこといつる

乎良佐伎波根乎可母乎布流比等乃兒能宇良我奈之家
乎禰乎遠敝奈久爾

むこさきハねをかもをふるひとのこのこがるけをねをこへなくふ
紫草ハ根こく衣を染こるをなーさきも地ことえりして、吾ハ寝る
るとなーちこさねをいこん料よりて、ここごるーケをのけきこよをして、
ムよ染こ紫こるこねここちこふハ言れども共寝こるるもちーに寝さぬ、
乎敝ハ紫五むつさこまちのまここばかくこを抜をわて多奴之岐乎信ハ木
とのあるハ楽こを抜めこ、狩領よ称辞竟奉といて、神の御徳を称へ
尼こ、紫めりをと尼こ、に果ちこ

安波乎呂能宇呂田爾於波流多波美豆良比可婆奴流奴

留安手許等奈多延

あはをろのをろたなれるたなみづらひろのはぬるゝあをことなくこゝ

あはとハ安房國の岳なるべし、ろハ助辭、を岳の麓の田みなるゝ自ら
生ゝるなればれたるといふ、たばづゝハむこづゝよりこゝにかゝるべきこの名れ
むすとなるハ俗字遠ゝて、武蔵の多摩川と多賀川と唱へるゆゝ
摩と賀の濁音とをよをてゝこづハ真蔓なれバ即むこづゝをた
だこづゝといふなるべし、まいひをハそもの花なるゆゑかづら
をりゐのゝ、遠もろれとらつゝひらバめるゝの約よりもおあとこゝれ
こゝハ吾を言英絶ゝなくこゝとりつゝぎなるとゆゝハをこゝるれり
なるべの俗へたゝこつゝのすゝ多のなれ花れんこの考へ

和我目豆麻比等波左久禮杼安佐我保能等思佐倍巳其

登和波佐可流我倍

わゝのまつまひとゝさゝれどあさゝのゝゝさゝこゝでとゝわハさゝのるゝのゝ

まづまハ真妻ゝあさゝのゝをよりもゝあゝるゝ麻絲もゝのゝをよりもゝ淫れ
るかゝゝ巳其登ハてゝゝゝ河て年ゝさゝ末ゝゝゝ和ゝ巳ひをるゝ
つゝあゝゝゝいつゝるゝゝんゝゝ和ハいゝれき、されゝ妻ゝ巳ゝるゝをゝよゝみゝゝ代ゝ
あゝかゝ花のゝこひゝてゝうゝわゝんゝゝとゝゝ女ゝゝとゝかゝゝるゝひゝれゝがゝれ和ゝゝゝ
を別女のゝようゝたゝゝゝよゝるゝちゝるゝゝゝ、ゝゝゝてゝゝゝたゝゝと同ゝ伝ゝゝもゝゝゝ、
てゝゝゝの年ゝて和ゝゝさゝるゝこゝのハゝゝゝてゝみハゝせゝゝとゝの上ゝゝゝ宝ゝゝもゝゝゝゝて古ゝの
みゝ句ゝと入れゝゝくゝゝゝゝゝぎゝ俗ゝゝゝ、ゝゝゝの三の句ゝゝ和句の上ゝゝゝきゝてゝゝ年、
をゝく同ゝ句ゝゝの例ゝゝ比ゝゝゝゝゝ

乃伊呂爾氐采也毋
あせがた　ちはやひのゆくるはりてくらべうけらるるものいろよりでぬやも
川あさこのしあれど、齊とさのくのよ用くるはるる、あるまと地名なるん
汐干ハはしとのぐのふんる月実ゆるるを、を汐干のあくゆさうよのぐのる胡
ぐるるよハるぐと、数てゆよりあれりれるとをくくるる波ゆ五
波流敝左久布治能宇良葉乃宇良夜須爾左奴流夜曽奈
伎兒呂宇之毛倍婆
はるぐさくふぢのうらばのうらやもをよるるよでなきころをしをくべ
くくむハまをくよくくやとくいくん序くうふくくろをしもだハ
ふ等と思くバくに伎撓まふまを春のくくぐのくくぐけくくるお
もくくるるるよんとくるるバくるとやはりてるくん
宇知比佐都美夜能瀬河泊能可保婆奈能孤悲天香眠良

武伎曽毋許余比毛
くちひやくつみやのぜのハのかちがちのくくひてるめくんきぐでしことよひも
うちひさくく枕ゆくくちひさくくいふとつををハせりくくゆ手三打久津三
宅の原くくよりかくくふハ敷まゆるをくくるるこのきぐでハ昨夜とりくけ序
枕るくくぐ考ぐ、かるを苑ゆる旬だうとりくるやくうれが系ハくの面のくくく
ぐるくれバ面るくくるりくくくをを枕ぐくくくくひつくくけるくくやくくるの
をくぐみくるかるのるむ、考ハるまくのゆくのくくるとりくハ槿をりくぐ、
槿ハむくげんとりくくれき、戒人ハくく居敷くくくのるくんといるいづれく
よりるるなく
爾比年路能許曉伎爾伊多禮婆波太須酒伎穂爾氐之伎
美我見延奴已能許呂
ゆひむくるのくどきるくくれバをぐ、きくほくでくきみぐみくるぬくのごろ

あるこゝろきハ詞(コトバ)續くいれば手付(てつき)の朱しるしの文字の笠間のもゝ敷ハ下ハ
だちき枝間まハ嫁ごゝろと称ハ選ばるゝこゝろ付ハ人をくゝ
ど、をゝ〜あるこゝろの那ハ男ハ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

須比と八矣之

美穎良由久君毋爾毛我毋奈家布由伎氐伊毋爾許等杼
比安須可敝里許武
みそらゆくくもにもがもたなびきていもがとこべあをかつらん
ものいふことこそいとをしけれ防人のうちなる人を思みそりてさすがるる
くもゐなるあをりてはまくをしけれよ妻ちくこ
安乎禰呂爾多奈婢久君毋能伊佐欲比爾物能安乎曽於
毛布等思乃許能巳呂
あをねろはたまびくものいをよひるこのをぢはりよとしのごろ
青柴之名八伽藤上八者の立やまぞ無りてるをとりて布をもとも
のこのごろハ此年ごろをとりる同じ物能の下安八術文之
比登禰呂爾伊波流毛能可良安乎禰呂爾伊佐欲布久毋

能與曽里都麻波毋
ひとねろふいちるものうらあをねろはいさよふなみのよるてをづまはも
ひとねは一茎ろハ伽藤之ものうらハとのかぐ〳〵あをねろはいさよふなみハ女
のつまをもとめて一茎ハ伽藤之ものうらハとのかぐ〳〵あをねろはいさよふなみハ女のつまをもとめていまゞ妻をもとめてひとりぬる
つまをもとめて一茎の茎を言ハ用るをれば言葉をいふ
つまをもとめて一茎とハいふる之上のいうをねるを面をいつきといふるもの
由布佐禮婆美夜麻乎左良奴爾努具毋能安是可多要牟
等伊比之兒呂婆毋
ゆふされば美やまをさらぬにぬぐものあぜをたえんといひしころハも
美山ハ真巳ろく所なる藤のこゝ、あををハ布川さらんぬく物川をを云ふも
ぬ物をを能くいつあ、ゑきこゝのの布をのぬく、我布ハぬぐやなる時あ
らんといひし〳〵時の後こゝ所ハ男の呼出て歌之

多可伎禰爾久毛能都久能須和禮左倍爾伎美爾都吉奈
那多可禰等毛比氐
たのきねるくものつくのをわれをくはきみよつきまつたのねとをひて
然れハなををくあらくに君よ伝くわれをくとらてつきるくハつきる
んと那よこを拾良ハ君をとをるる歟くるひてくいてくる
阿我於毛乃和須禮牟之太波久爾波布利禰爾多都久毛
乎見都追之努波西
あがおもの わすれむしたハくるをねたつくもとみつくをぬぐせ
神面のをとれんけハ之太ハけとりつるをあるを菊ハをとれしをハ
をとをれてをよくくで君をこ面形のをるをくくをいてるを同じくを遠ハ
で年絶くるをまるく歟のをハ面形をけるを知をくねくを遠き場をて八をを
のみ那見んをれハををいをくくををを

[illegible]

一本葉[illegible]

思良久毛能多要爾之伊毛乎阿是西呂等許巳呂爾能里
氏許巳婆可那之家
[illegible]

[illegible]

伊波能倍爾伊賀可流久毛能可努麻豆久比等曽於多波
布伊射禰之賣刀良
いたのへにいがるくものかぬまづくひとそおもふばふいぞねめとら
[illegible]

上の上野国の伊香保ゆるあまぐもいつぎてこゆるこの白雲くもゐはき
こゆるかも　右の一首は作者未詳　右の件の歌は或ハ云ハ
[illegible]

奈我波伊爾巳良例安波由久安乎久毛能伊氐来和伎母
兒安必見而由可武
ながはゆくこられあはゆくあをくものいでてきわぎもこあひみてゆかん
[illegible]

於毛可多能和須禮乎之太波於抱野呂爾多奈婢久君母
乎見都追思努波年
おもかたのわすれをしたはおほのろにたなびくきみをみつつしぬばん

大野ろのろハ姓氏録に廣世といふ。そハ此とする所我孝毛乃ミこと世とする所の成女ちまぐし。されどうれハ和名抄に乃世とあるせしくるいしを
ハ人の名とそんはハ和れぎとなくさあるべんしるくさを美
可良須等布。於保乎曽杼里能。麻左低爾毛。伎麻左奴伎美
乎。許呂久等曽奈久
かくまとハ。おほをそどめのまとぐでおもきてぬきみを。ころくとぐでなく
かくまとハ。ハ形といふく。乎宮ハ常ちる宮。常ちるいふ日じく。伊ふすなくん
うくまとハ。大伊多ちといふこと。岩三あるてハ月えんなくる。ちいたく。平宮
ロとこれとおれなくんのし。といふ。伊ぐしおそくんこうしてえ。鬼と。平佐伎
現を平ぬくといふぐし。於ぐの風流士。於ぐやぬきてくるぐハ純くんこきき
るくまくかるて於ぐるれハこれとハ別えまくでハ真定えこころくハ形のこころ
くこころくと悟ことくと。子等来とちて。ちぐのまるやとぬるようひ

ちくれハ大伊多ぐくく形と罵くほる宮の狩を人くとちるせるも此歌と
伎曽許曽波兒呂等左宿之香。久毛能宇倍由。奈伎由久多
豆乃。麻登保久於毛保由
きぐこくハこころとさねーあくくのらくゆなきゆくたづのまぐくなくほゆ
伎宮ハ昭和。ころハ宮えさハ愛宮。そのとちる乃歌のみくくて
をこころくまくのまハ真
佐可故要氏。阿倍乃田能毛爾。為流多豆乃。等毛思吉伎美
波安須左倍毋我毛
さくのこころてあべのたのしおるたづのこきくみハあちくとぐし
後河内屋の板の彫りる。岩三行歌の方道くあるハ此の歌。
上ハ序ちく。彫るとハいさぐ。たぐめと二つとるとこて。ちき彫とて
さくたあくまり留というぐう日並ぐてまんけ。ぐまぐ。ちくと義

いそれき、宮もうは之きいうしやまきて、毎日まゐるちく本居の説を義て、
ヤづ留ーあるりるしまれうとえとい了
麻乎其毋能布能未知可久氏安波奈敝波於吉都麻可毋
能奈氣伎曾安我須流
まをごものあみちのくてあいなべおきつまがものなげきぞあがこてる
題宗紀耶賦能之摩伽枳伊ほよ十上の苔ごもそどいるはゆひめあみめを
節をいつを解く布ふいつ薦の上のこげきをきとい了、上のこのおみハ
近きく係ーくこのこのあくをきのみあてあぶなら之仲つ三解ハた
るけき登くく近きあと遠きあを著へ以て、若ハ未ハ未の係ーく習を
ちくんといれつれど、のみとるとくまさけうまとてハまきき敬語の
水久君野爾可毋能波抱能須兒呂我宇倍爾許等於呂波
敝而伊麻太宿奈布毋

みぐぬよかしのをのはころぐ〳〵おとなろをくいまこねなみも
武義の秩父郡より水久具利とら富ち、力十和の泥とりいの、をの手ハ略
のあぐきのあくといつ、ぬ之義くねぐきをるハ少強るうる〳〵抱く、夫役の約備
ちをと抱ふ強ーとうをろぐハ言強るハ〳〵て之、於ハ於柿の約ちれハ強ーと
於ちといで、波信ハ分いひ、ちと延る泥ねちよハねあと延ち、ちハかものとき、
ぐくよあがきまぐきてよこと〳〵ひこ〳〵そろ久氏れの者よあ秋
みまくよくく〳〵ちくるのあく、男の毋ひまくぐ〳〵けまてもおこそあ
とぐあき強ぐくうよ之強ハそれき、それど強ぐくうやあく、宮きこぐ
ぬのぬハ強之、ちぐハ甫之略ハ足強くて使行工使ちると甫ちと、ちて上二
句ハ於ちの序之略のあうくハおろうちく、甫ぐがやくちることと、こう〳〵ハうハちる
之、ぐうハちよこうのくねんくうひしくいまぐねくと、おろハおろちのみのとと之
といて了、者九ちぐる 辞緒不延こうて、ことのをハ〳〵ぐくどあくくハ之是ある

[illegible]

奴麻布多都可欲波等里我牺安我許已呂布多由久奈毋
等奈與毋波里曽補
ぬまぶたつかよはとりがいあがこころゆくなもとなりそね
[illegible]
[illegible]
[illegible]

等夜乃野爾乎佐乎左毛禰奈敝古由恵
爾波伴爾許呂波要
とやのぬをさぎねらはゝをさもねなへゆるとよはゝみころハえ
よハをさゝゝゝ

はるのぬよくをもむてまのくちやまずあを土あぶらんいへのころそも
弱の弟をもむがとやみなきをそそ[illegible]
とりしらんと海人のうるなしん
比登乃兒乃可奈思家之太波波麻渚杼里安祭由牟古麻
能乎之家口毋奈思
ひとのこのかちけしだいたまもどめあをゆむてまのをけくをな
[illegible]
暗のはやのまとりつあくゑ、ふるハ情ふ侵りくゑ、[illegible]
[illegible]
[illegible]
安可胡麻我可度氐乎思都都伊氐可天爾世之乎見多氐
思伊緞能兒良波毋

あうごまのかいてをついでふせをみてしへのこらそも
上三句八馬のてをの口を出んとられしえ[illegible]
[illegible]
を思ひ出くなくゑ
於能我乎遠於保爾奈於毛比曽爾波爾多知恵麻須我可
良爾古麻爾安布毛能乎
おのををおほるなおもひそにはるもちをまをそのからよこまをあをあを
於能ハ妹をみづうゑ已といもゑ、乎ハ即夫をいふおほるハ生ひそハるの
[illegible]
[illegible]
[illegible]
安布とハあを答をいてゆ布信を毛へば

安加胡麻乎宇知氏左乎妣吉巳許呂妣吉伊可奈流勢奈
可和我理許武等伊布
あのごまをうちてさをびきこころびきいのちるせなのつがめさんといふ
さとりのさい爰ほうくをびきハ俗ようをびきもをるでいふほどう
ちるぐーとるとおて引出或ハ引とゆめちるとゆとりうるあるよりう
ゆるぐーちでいふよしくーさおくとろとこてあそびて反
とこの作ハまんといふいうけのつくるまやと女のつくめるとよんゆ
とあいそれき宣ちさそびきハ俗轟まくるの俗とりくさくよこ言
ばんびきのひきといふんこのくーわづらうとよいたづ和んさりうんるのく
ふこてあるくさ言ふいるまるまぞくいこといつて考べし
久敝胡之爾武藝波武古宇馬能波都波都爾安比見之兒
良之安夜爾可奈思毋

くぐーふおむきさもむこまのをつるよあひくーとらーあやなかなーも
くハ馬塞の籠くとるハ一二句ほうて上句より下呉ちるまこまをあ
いつちかきのおの麦を踏くーしてくーを作ふ口のつくーのふくーくをいよ宇ハ衍
字あるくくを古るなるぐーをくーハ塞ものふくーくをいよ宇ハ衍
ちぐくをくハるいきくーのなるるるふとれや
或本歌曰宇麻勢胡之牟伎波武古麻能波都波都爾仁
必波太布禮思古呂之可奈思毋
せうませくーをほーおひをくハ新庸くー
比呂波之乎宇馬古思我禰氐巳許呂能未伊毋我理夜里
氐和波巳許爾思天
ひろぐーをうまこーがねてこのみいとどりやりてわハこてみーて
比ひろぐーをうまこーがねてこのみいとどりやりてわハこてみーて
くるるあの伝度指をハ波ぐーをうぐーおハ呂ハ良の

ことゝく一枚の手板をとりてゝとゝくれき、奥中ハ麻と一義ハ計の稿と云ゝ
とゝ、宣考ハ中板ハ閑とゝまて石と考ゝ乃稿ゝ考ゝ其ゝ考ゝ
えゝゝ、さゝく時ゝゝやりての氏ハ豆の稿ゝくゝやりつるんゝいて、稿考ゝ

或本歌發句曰、手波夜之爾古麻手波左佐氣

山ふかき手つるのきれ走よりて、ゝたゝ、ゝのゝ、
ゝゝけハ走ゝあけと稿ゝ

安受乃宇敝爾古馬手都奈伎氏安夜抱可等比登麻都古
呂手伊吉爾和我須流

あゝのゝへゝこゝまとつゝぎゝあゝほのゝひとまつゝゝとゝいきゝわゝのゝ
あゝハ閑塞ゝゝ田ゝとのゝのゝゝゝハゝれき道ゝゝゝ宇鏡ハ堺
崩岸也久豆礼又阿須ゝゝゝゝ伎ゝちゝけの花きゝゝゝゝゝ、
あゝゝゝハゝくあれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ麻都ハ都麻のゝゝ

万解十四下　廿九

かゝゝゝゝゝ比ゝ豆麻古呂とゝあゝ他妻子等ゝいきハ今ゝ、ゝゝれゝ
いきのゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まゆつせらしたのまハ後語よてゆゆしくせるもいふるべし

佐射禮伊思爾.古馬手波佐世氏.已許呂伊多美安我毛布

伊毛我.伊敝乃安多里可聞

さぐれいふこまをさせてこゝろいくみあおもいるどゝいへのあるうかも

さをさせてハまをらせてゝ乃ふむ乃ふるのえのあやめハ草くハ[illegible]

さかきをさ[illegible]川のさぐれゝみるゝわぬどものこまのくる花とゝもあゝぬる

武路我夜乃.都留能都追美乃.那利奴賀爾.古呂波伊敝利

毋.伊末太年那久爾

むるどやのつるのつゝみのなゆぬどゝろそいてゝもいまだねなくふ

[illegible]

よみしゝぶを陸奥ゝ有地るゝん[illegible]

八波ハ下野とゝれど水ゝ字ぐゝいはゝのふれバゝゝのゝ[illegible]

一作をゝ久んを、意の知るふよせるゝん柴ぬるゝいどまぐねてゝぬゝゝ

爲ハゝれつれどゝと字のやゝまてせんハ作をなるべし.奥中ハ中世ゝ都

留那をつるの花ハそこなどゝいてゝ行考べしがゝの爲ハ後ゝ出

阿須可河泊.之多爾其禮留子.之良受思天.勢奈那.登布多

理.左宿而久也思毋

あすかゝ泊てゝふぐしるを上てゝ[illegible]てせゝてゝふてゝねてゝやも

あすかゝ泊てゝふぐしるを上てゝ[illegible]この方の作をくゝのをたゝゝ爲

いそれき、更級日記古本むゝとゝてゝのあゝいなるあすぐゝゝいる

をゝをゝゝれゝゝそれどゝゝゝ二をゝ作可川とよみくれバ東ゝも大和ゝ日名の

川をゝなるべし.さて爲ハ男のんのまゝゝるゝぬとゝ、せゝ美をゝなゝハ

姉名祢ゝるどのなゝねの泊と同ど、六帖と猶ハ座ハゝゝてゝ上をみゝ古

ゝるゝものとゝねてゝゝゝき

安須可河泊世久登之里世波安麻多欲毋為禰氐已麻思
乎世久得四里世波
あをやぎのせくとをしてあせば
かく許なるのせきもむるとなくあぶくあねてこまーハ率み度てもん
えのとも
安乎楊木能波良路可波刀爾奈乎麻都等西美度波久未
受多知度奈良須毋
あをやぎのそらるかとふなをまつとせみどいくまでたちどなるとも
柳の芽の張る川つゝせゝらぎハ清水心ゝたゝみつゝすまハ
みをハ汲で波を待て立くたのゝしみなゝてゆゝみをるをしふ
ゝ
ゝどのどゝとゝろの男ゝ
阿知乃須年須沙能伊利江乃詩毋理沼乃安奈伊伎豆加

思美受比佐爾指天
あちのすむさゝのいりえのとをゝめのあれいきづうゝみをひさふて
味鴨の極へ笹の入江柳ゆまるく伎よるふるぶ花ゝ江ハ車國まる出るまぶ、
上白ハいづせき出ゝ毋ゝのゝこのまあごとゝくまるハ印ゝ之爲年知と遲ゝ伎る
奈流世呂爾木都能余須奈須伊等能伎提可奈思家世呂
爾比等佐敝余須毋
なるせろまづのよゝなまいゝのきてかゝけせろふひとゝへよゝも
嶋瀬へろハ泡沫、こづゝこづみゝを本くづの流れよるかくゝの人のゝひゝとゝ
またゝゝいづのきてハゝまも
多由比我多志保彌知和多流伊豆由可毋加奈之伎世呂
我和賀利可欲波年
たゆひがゝしほみちわたるいづゆのゝかなりさせろゝわがわかよゝん

たゆひのこと越なるあるべきなり、をすもまるでいづるも所従欲こ、
もハは、わづかハ名所こ
放志氏伊奈等伊禰波都可禰杼奈美乃保能伊多夫良思
毛與伎曽比登里宿而
おりていなとゝねつゝねどなみの穂のうぶ〳〵せよきぞひとゝねて
こハいとゝなどゝきこゆゝ為ようゝれハ初陸奥といひてゝ松つゝ
などあゝるゝどもれハ為ようとゝるきてうまいしゝきこゝてさゝる
わゝどせねど吹たゝ〳〵ちくゝ寝ぶれハいねゝ〳〵とゝ
女ゝるゝとかゝくゝるゝんゝとゝいゝるゝゝ〳〵ゝ枕を枠ゝて寝
巻ゝく巻ゝるゝをゝよゝちみのゝの八神代紀ゝ浪穂といゝる山間ゝく
阪のゝんゝゝゝゝゝハ巻十八甚振浪といゝるひゝゝく〳〵ゝ
巻十七ゝ伊多ゝちゝ〳〵ちみといゝゝて浪の振動とんの動ゝよゝと

いかれき狩考ゝ〳〵
阿遅可麻能可多爾左久奈美比良端爾毋比毛登久毛能
可加奈思家乎於吉氏
あぢかまのかゝふさくなみひらせるもひもとくものかすけとなきこ、
ハのぢのまハ巻十一ゝ巻ハ巻十一ゝ巻ハ巻十一ゝ巻

此のいとゝ急がるゝ、そゞ前の後は、まつがうちうは、男女の住所とうの作和恵は、後は
て、家人は言痛、ものの用上は、占四ちぐして、ちゝくゝくさゝぐといつて、此下みるり
加敷の毛加茂は、はかせんもよみく、此者わの作和は同じく、後をとて、恵は、詩人
まんとぐうの吉は、安後まく、人を、相ほをもとろのとろは、曲解まく、かくいし
さゆぎ、占四さぐ、ぐるとし、それを、思ふるるれ、ゝ、ゝ、ゝ、云人、掩は、布
ふ屋、乃は、家を屋、ゝ、ゝ、ゝ

いさごのぬるところのあるみるおいたるみづまもごのそよいつかてねまくも
潜くもとたく法師よ唱てうりとゝゆ、されば思ひてるもとよりいひもて
なかゝとて濁れ人、具久八久具の下よりもれもと申ハうりく他し、
谷具久ちで同じ俗之

麻久良我乃許我能和多利乃可良加治乃於登太可思毋

奈宿莫敝兒由恵爾

まくらがのこがのわたりのかちのおとたのしもよねるこゆるこ
まくらがのこがのこがのわたりのかちのおとたのしもよねるこゆるこ
加治乃を思へば系名まてハ一本して他る加伊のこ有りよ、メヅカ集よ他
本と法くハ今繪とうつ抱ほ加くまよりまし知ら、出ろるるん、そかぢ
のうとハ人ろよ初くまハねさせぬ時ろるものをとゝ

思保夫禰能於可禮婆可奈之左宿都禮婆比登其等思氣

志那乎杼可毋思武

志保ずあのおとのれハのもの、さねてれば、ひとゝとさ、ゝなをどこのもさうん
上ろ志ちりずのの系ぐ、くといつるハ陸又ハ磯るぐくよ世系ぐて立とりよられば
ゝゝもさめて波まちもるる彩をのゝ、ぐ、さて時ろくく浪をとりて浪
ゝとよ寄ゝ世ろう、於と字ゝ毋ひて浪れば、侯紀宣命ヨ宇年加志ゝて於年加志
ゝいつるのゝ、ぐ、さてうれてよろゝて立ハ世て、ろゝとてねてれば人ゝ世ゝ之
ゝあいれき、宣ゝろうれば置れば女とあねゝておれば、船よハおくゝいよ
るれつのハ、ゝうねど、系らぐて浦ゝいぐ、ヨ系くく左毋を又くゝれよよゝ
てよるちゝぐ、ゝ浪れぐ之のゝぐ、ゝ、さてなゝとゝうて志ん八汝を何ゝ世ん
くゝあゝと男ゝゝゝとゝて

奈夜麻思家比登都麻可毋與許具布禰能和須禮婆勢奈

那伊夜毋比麻須爾

なやまけ・ひとづまかよこぐふねのわたりをしいやなの・いやなしとなれ
ちやまけのけはきてゑ、特母のとりてくりてくるきを乗りて次のちい人妻
の母をく遠くりをるのをもハ男子男のおくれ・ぬくなぐくりをりて
なるぐ、さて人妻ハおを時ことを男ぐくわづらハきをのを
とりみん、られハせをるハをられとせねのとねをく伊をくこぎり母
のををとりんをりをられ、後をかくをひ恋をいてるちるぐ、とる
いそれき、宮ををこぐふねのハなやまき翌くをるわの目妻人ハやそれで
あをこぐをのをとをある白法心伝のをとをゆきさぐみちをらるぬく母をこき
紛ことのちやまきりんやのるハわをれハせぐちるく、をれぬをこといる
ををれをせをとりのををちる母ハわをれハの、ハのをを叶ぐをれぬ、わをれぬを
ををんうをちるぐ、

安波受之氏・由加婆辛思家年・麻久良我能・許賀已具布禰

爾伎美毛・安波奴可毛
あぶてゆのぶをりくんまるをのこぐふねよきをみてあぬのし
あををてハあをりをとををりをを男ふをれをるをぐ、
を男ふをれをるをぐ、

於保夫禰平・倍由毛登毛由毛・可多米提之・許曽能左刀妣
等・阿良波左米可母
わをほぐねををゆもををかくあて、ををのをををびをあをハをををのし
船ハ艘舳の厚のををををををて船ををを
めをををををを

曽安我古布良久波
まごのよくよのまそほのいろよでいたちくのみであのこうくハ
さ金ハ淺とりよ、古倚中山ハ古くさ淺を出てかよまゆねつく古爺
いつをのめし、丹生ハ和名抄上野甘樂郡丹生ていこうくハ、この丹生まそて
も、方ハ淺をよきしの、布ハ赭土のうあるよのうとなるしちらん、
こを丹土の色よ出るをえくこひを孤ハをよたよ、未ハ名をつるハ、そて
いたのこそよ
可奈刀田字安良我伎麻由美比賀刀禮婆阿米乎萬刀能
須伎美手等麻刀毋
かなとだをあらかきまゆみひのとしがあめをまのすきみとらまゆし
かちくハよを出別門田みくかるのんのおちる田をよ、あくごのきまゆみハ
荒木のうえ初白の田よりあくごのきとつけ、そあくごのきを荒木のうふ

ゆしいちて、うとりよりうりとこの白ハ〻ごくされど荒ハ初よりのまで田のう
ちるゆふうの方を交ハりハ古をちくねバ由美ハ一の巻の字ちごの浦伏る
ちんの田ハ巻よりうる鈍ちてかきちくをと荒ごきとしハ、ゆ苗と植る時を
るとこちのきとしを接ていてアゆをてうくちうハ通ハ時、早をハ植ごくて、
鈍ユ面を結ちるハバそとりて序とをちるゆ、比賀刀礼ハ日之照れハ心、
あちを第刀伎須ハ面と結ちえ、きとをらまをハ君を待とえ、上の刀ハ氏を毋ハ
ハ下二つの刀ハ都を毋ハくうり、等ハ助辞ハ第の伎ハ大まゆ云、まゆみハまゆむと
ちくくくをちて、まゆむハ地の干ワるとゆゆ。ハバまゆみハ地の干るれてとをえ、
をこのうかハ〻いせのを人うで、夜の早ゆ加つ和の稀ちとまよとを、を早の時を恨て
ふをちるハバまよハまゆむて、地の干ワるよりゆてるをちるゆ、又よあワてとを又
ををあかこれをよりとゆみと固をなるゆ〻とハ、ゆ牧よく考ゆ
安里蘇夜爾於布流多麻毋乃宇知奈婢伎比登思夜宿良

年安乎麻知可禰氏
あかねさすやはのあたりのうちなびきひとりやぬらんあとまちかねて
夜ハ麻の浦なく荒磯田ちるごゝ、宮ハ夜ハ沼の浦れ、ありそまよハ必まし
ちなく麻とちるかちといふ、玉藻のなく分とちるこうしてぬらんと云
比多我多能伊縑乃和可采乃多知美多要和乎可麻都那
毛伎曾毛已余必母
ひたぶるこのいそのわうのあのうちみぐさわをこのまつおもきぞこよひも
ひたぶるハ比ゝ也、宮十二要大の仰ぶとよちるかちやわの兄ハ和名抄海藻逐
木采俗用和布とゝなるべしゝやわの磯波のまゝよ流れるびくゝ、蛭の男ひ流るゝと
ぶるゝ、多知ハ旅、美多要ハ流れ、まつるまハまちらんこゝ、良とをしりよ
ゝ事多ふゝ

古須氣呂乃宇良布久可是能安騰須酒香可奈之家兒呂

乎於毛比須吾左年
こもりぬのうらふくかぜのあどすこのかをりをとゝをひもとけさん
武蔵と十伝のあそひの菖蒲ハ小菅といふ和名抄ハ里中ちれど、
武蔵ハ古人隅田川といひ、あるゝ古くこのゝ浦といでぶこゝとしよちらんあど
ちゝの八行と菖とのとりゝ、様ちまるまさかくちゝぞといてるゝ同じ、さて
浦吹風のとりあつ行の句一ゝれ、風ハ吹ゝる物なるあるゝ、行ゝ也バ、
風のうるゝ嬢のうゝとちひるさんやゝ、とひのやるゝくなきゝ、ゝ、ゝ
可能古呂等宿受屋奈里奈年波太須酒伎宇良野乃夜麻
爾都久可多與留毛
かのころとねずもなるんはぐゝちきゝゝめのやまみづくかゝとよるも
彼ハ兄ゝ姉とゝ、古ちハ兄等ゝ、ゝ、ゝ枕詞、ちきの都ゝ、ちゝ、
ゝ和の心ハ比ゝ也ちゝん、てゝくゝとよるもハ月所傷ゝ男の姓ゝかゝ、ゝて入ゝき

敵ヲ敵ニ誤

るを給何しほぐよ、春夏月をうぐけばかくて逢ふねぞやあんとなぐるを

和伎毛古爾安我古非思奈婆曽和敝可毛加米爾於保世

年巳許呂思良受氐

わぎもこをあがこひしなばそわへのもかがみなほせんこころなしにて

義孝敵一本恵ヲ仮ルヲヨシトス、それを八上の作和恵と用ひるゆゑ、

このをとこ、おほくはをとこ、男女ともに、逢ふ人の業

といひたるを、をるんをばくハ、をとこ、ぎてといひたれども、後ちをとこ、

加采一本加未ともいひたれども、はつ解ごとし、校考べし

防人歌

於伎氐伊可婆伊毛婆摩可奈之毋知氐由久安都佐能由

美乃由都可爾毋我毛

おきていのばいもはまかなしもちてゆくあづさのゆみのゆづのふしごも

時と格を考へく行ハ、悲しく、弓束ヲ、あれの、撰へゆゑんをとゝ

於久禮爲氐古非波久流思毋安佐我里能伎美我由美爾

毋奈良麻思物能乎

おくれゐてこひばくるしあさがりのきみがゆみをもならしまをのを

防人の妻の方を、こゝ、逢ふ、勢、ぶ、ちをいそんるのくみく、そなれるゆ

ゑているゑ

右二首問答

佐伎毋理爾多知之安佐氣乃可奈刀低爾手婆奈禮乎思

美奈吉思兒良婆毋

さきもりにたちあさけのかなとでにたゞはなれをみなきしこらハも

をとゝでハ門出ハ、たゞはなれハ、ハ、離れゝ

安之能葉爾由布宜利多知氐可毋我鳴乃左牟伎由布敵

思奈乎波思奴波乎

あのそてゆすぎうたもてつかもおねのさむきゆふべはたをばまねなん

肌そもこ波路なるあくはとよこひまつべしをとゞ波とぶ〻をあるかる

うるゝきをあしとやうゝ

於能豆麻乎比登乃左刀爾於吉於保保思久見都都曽伎

奴流許能美知乃安比太

おのづまをとひとのさとにおきおほくみつゝぞきゐるこのみちのあいだ

をこゞまをとひて他の里まをこ所ゆゝぞつのをくてもちゝきるのあと

かつるゝしつまをこ拾ふ見とをくほふよあるゝ

譬喻歌

安杼毛敝可阿自久麻夜末乃由豆流波乃布敷麻留等伎

爾可是布可受可毋

あゞをくのあゞくまおいまのゆづるとのつてまるときるかゞせをつのもゝ

あゞをくのハ何ゝゝゝゝ思ハ思ふる間あゞくまおそれゝ陸奥の国武

久麻ふ山ふるあくまるハ老サのをあるちはのあのこのてゝうの傷ゝ麻

倭等ゝいつるる言ハ国ゝゝて、うれハ時の懷ふ合まるゝこハ此ゝ先ゝ

ひゝけゝるゝと、恋のいまゝゝゝさほゝふとゝとの、風ふのゝうしハまゝ

きほゝふハふゝゝて、今とと歌く吹ゝゝくハ何ゝてゝとゝゝやとゝゝ

古事記神武條　大后の御歌ゝ言ある字泥備夜麻許能波佐夜麻奴加是

布加年登須

安之比奇能夜麻可都良加氣麻之波爾毋衣可多伎可氣

乎於吉夜可良佐武

あしびきのやまかつらのげまゝばかりをおきやのらやん

年十九月の山下日うげうづけるとゝる間ゝ日後夢へ行るを日を

男くかげとのいてハ年千三うぢの山新山と玉ノ浦といふるぶ〻、みそと山
うづくものくもいふハ古今六帖ニ三宮のよの山うづくせん古と寄ニあちの
山の山人と人もかるうふ山ぶ〻ハ
もゆ数き日暮つづくとよりふ〻おきやうくうん八奥山の老杉ちくのく
まるあるれバたやもくハゆずきを後ニおきうくそハ世ニ惜むべきる
ちるる望つくまるもゆづこうるべき時と、あつよ〻ちくて後ニ来つると
とゆ、まハの月ハ上の月ちくこのもやまのまハ月とりふ月ニ宝ち後
を寄いてゆ、ちゆ月ハ波とはるてゆちべきこ作考べ〻

子佐刀奈流波奈多知波奈孚比伎余知氏平良無登須禮
杼字良和可美許曽
をのことたるとちたちばちとしきよりてとうんとにゆどうわるみのも
をくとハ天の名たるべ〻年十九ニ天比ニたるてゆてわづらきき

きまセバうもたのき小里（フサト）とよめる八伊ニ毛を重ねくぶくりて学ゆれ
バ〻ち地名ハあくもして、多伊里をいふの、又伊勢小国ニどのふそ、
たるくくるの考ハわづ名の花稿のいつ〻もむ多ぶてそのこ多うえ、
考ハう〻美〻花咲べ〻き梅と植ゑく人ニ多壁ニ思ひでわがそるべ
いる彩ひこ、仰き女を考ると

美夜自呂乃緒可敝爾多氏流可保我波奈莫佐吉伊低曽
禰許米氐思努波武
みやじろのをかべにたるかほのさちおなきいでそね、こあ〻さぬん
ゆもつる落めて米ひんと
奈波之呂乃古奈伎我波奈孚伎奴爾須里奈流留麻爾末
仁安是可加奈思家

なゝしろのこぎがをちかをきぬ三さゝなくまはくあぜうかなつけ

こちぎ後二句あぜがなつけハのぞや世きこゝをみのゝのぶほゝのかきつばされ

ふもりつゝけそんぬ日さゝぐべもとうめく妹さきくこゝをとをとれを拾分るに

ゆをそ日さてゝむまゝに涼くゝ思ハるゝ心ハうでかくゝとゝ月後之文廣ハ古奈宜とせう

挽歌

可奈思伊毛乎伊都知由可米等夜麻須氣乃曽我比爾宿

思久伊麻之久夜思毋

かなしいもをいづちゆのめとやまずけのそがひにねくいまゝくやしも

山ちげの枝ハ毛枝ある多せとをいづちゆのめとゝ蹲竹のそがひにねく

いまゝくやしもとりてる母ゝ

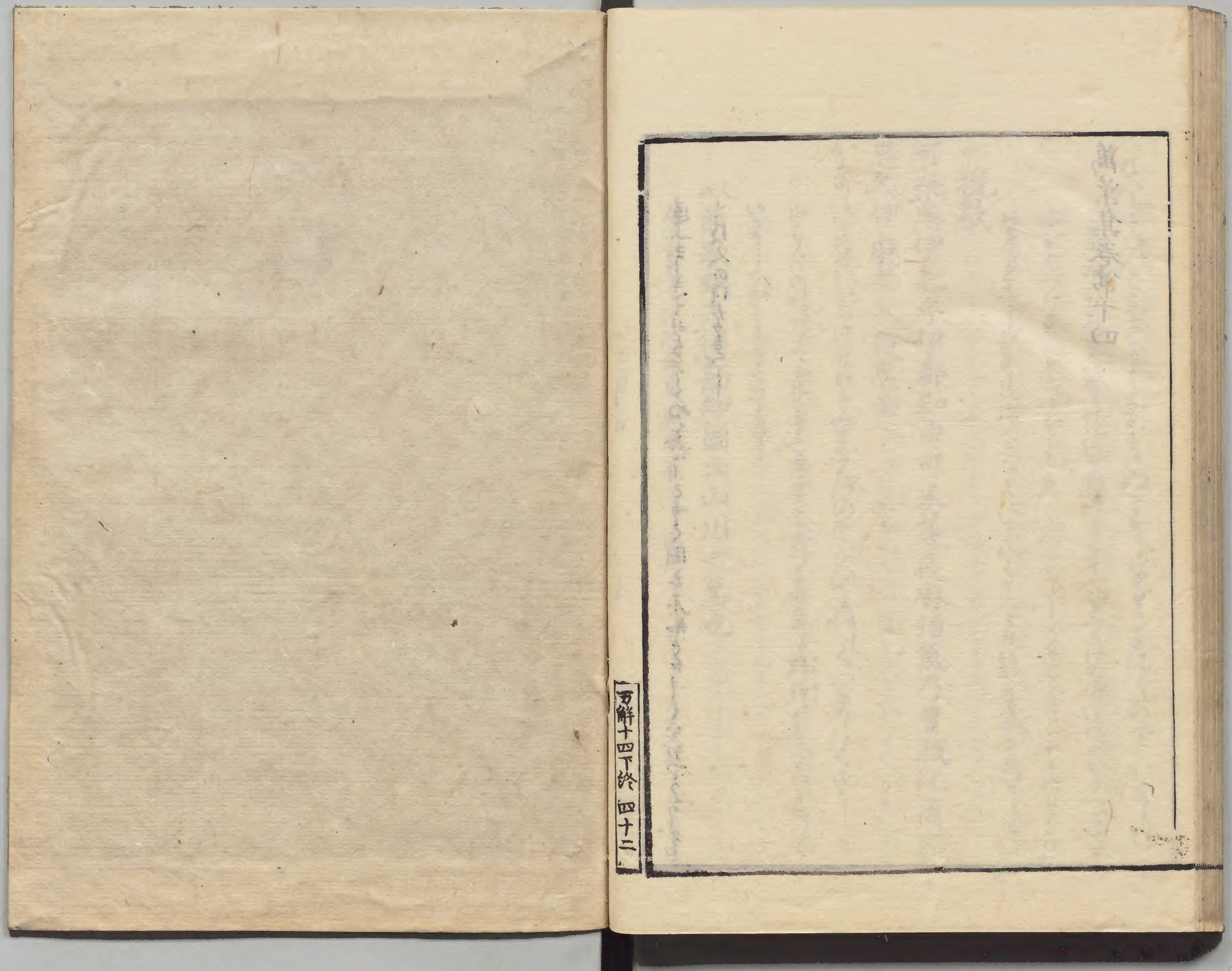
以前歌詞未得勘知國土山川之名也

たのゆきそ伊波平ゝ對馬岸ゝ國ゝ見ゝ又ゝ知ゝそうゝ

遠ふまぎきゝみるこゝろぬと、おゝこゝあく國ゝ不知とゝ知ゝもゝおゝつゝゝ

ゝ夜人の語なるべし

萬葉集卷第十四



万解十四下終 四十二

国立公文書館
National Archives of Japan